

日本学術会議会長談話

本庶佑先生のノーベル生理学・医学賞受賞を祝して

この度、本庶佑京都大学高等研究院副院長・特別教授が、ジェームズ・P・アリソン氏とともにノーベル生理学・医学賞を受賞されました。心よりお慶び申し上げます。本庶先生は、23期まで、長年にわたり日本学術会議の会員・連携会員としてご活躍くださっており、このたびの受賞を、日本学術会議会長として大変誇りに思います。

今回の授賞は、免疫抑制分子を標的にしたがん治療を発見したことに対するものでした。本庶先生は、「PD-1」という免疫抑制分子を発見し、この分子が免疫を抑制するブレーキのように機能すること、この分子をブロックすることでがんを治療できるということを証明し、全く新しいがん治療の理論を提示されました。

日本では、現在 150 万人を超える方々ががんと闘っていると言われております。がんで亡くなる方は年間 35 万人を超え、しかも年々増え続けています。がんは日本人の死因の第一位となつて久しいですが、本庶先生の研究成果は、今までにない全く新しいタイプの治療薬としてすでに実用化され、最も効果的ながん治療法のひとつとして世界中で用いられています。世界中のがんに苦しむ人々たちにとっての大きな光明となつた本庶先生のご研究は、今後もライフサイエンス分野や医薬業界への波及効果が大きいと期待されています。

本庶先生には、今後も引き続き研究を続けて業績を積み重ねていただくとともに、後進の育成や学術界・社会に対する発信にも力を発揮していただきたいと思っております。

今回の受賞は、我が国の科学研究の高い水準を世界に示しました。我が国が引き続きこのような独創的、先駆的研究成果を上げていくためには、基礎研究の重要性を再確認するとともに、若手研究者の育成に力を注ぎ、多様な研究の芽を育むことが重要です。本庶先生は、会見において、研究で得られた果実は、後進を育てることに使いたいと仰っていました。未来を支える若い世代を学術の世界で育てることは喫緊の課題です。日本学術会議としても、我が国の科学者を代表する機関として、引き続き、多様な研究の意義が広く理解され、社会に浸透するよう取り組むとともに、学術のさらなる発展のために力を尽くしてまいります。

平成30年10月16日

日本学術会議会長 山極 壽一